第１回「日本語大賞」

テーマ　「人と人とをつなぐ日本語」

小学生の部　優秀賞　受賞作品

「やさしい気持ちで話せれば」

愛知県

尾張旭市立本地原小学校　６年

五十嵐　尚輝

東京書籍

やさしい気持ちで話せれば

尾張旭市立本地原小学校　六年
五十嵐　尚輝

ぼくの家ではミニチュアダックスフントという種類の犬を飼っています。名前は「アル」です。体の色素がうすい「アルビノ」というめずらしい性質だそうで、そこから「アル」と名づけたのです。お酒好きのお父さんは「アルコール」の「アル」だろうと冗談を言います。ぼくは、まだ生まれて間もない「アル」をペットショップで、一目で気にいってしまいました。ちょうど犬の映画を見た後でした。とてもかわいくて少しでも長く一緒にいたいと思ってしまい、両親におねだりして買ってもらいました。

最近、気がついたのですが、「アル」に話しかける時のぼくの言葉づかいはふだんよりもやさしくなるみたいです。気持ちが言葉に表れるのかもしれません。気持ちがやさしくなれば、自然と言葉もやさしくなるのかもしれません。

「アル」は遊ぶことが大好きなので、よくボールを投げて取って来させるのですが、いい子でキャッチしてすぐにボールを持って来たときには、頭をなでながらよくほめてやります。犬にもほめられていることがわかるんだなと感じます。「アル」はほめられるととてもうれしそうな顔をします。そんな「アル」の顔を見ると、ぼくもうれしくなってしまいます。

ところが、お兄ちゃんとゲームの話をするときは、まるでけんかをしているかのようだとお母さんに言われます。ぼくは、お母さんとお兄ちゃんの勉強についての話のほうがもっとけんかっぽいと思っています。「アル」もどこにいたらいいのか困っているようです。お父さんとお母さんの会話も時々どなりあいになります。

ところが、家族四人とも「アル」と話をする時は、人が変わったように笑顔でやさしく話しかけるのです。みんないやし系の「アル」が大好きなのです。やっぱり、気持ちが言葉に表れるのだと思います。

クラスの友達や先生と話すときにも、自分の心を素直にやさしくできれば、おたがいに気持ちよく学校生活を送ることができるのだと思います。これからも、「アル」と話す時のことを思い出して、やさしい気持ちで言葉を使っていきたいです。